

い、そして取戻いは、老兄の評もはしき也（兵庫、武岡豊太氏藏）

右先人贈小竹翁俗牘也、然言々句々對知己之語、真率不飾之意、自不可掩也、其著政記十三四卷、欲得翁觀、至豐臣氏問竿之事、則翁如何答之邪、先人精神瀕死不衰如此、豈啻此而已、論內廷一篇、置通議中、蓋臨歿三日之事也、此手簡距沒日、蓋係十三日也、觀者憫其精神、勿罪其他也、

明治壬午三月二十又八日

頼 復 贊 識

これは歿前十三日、即ち九月十一日の手紙である、何と精神のたしかなものではないか、大阪河内屋喜兵衛に出版せしむべき山陽詩鈔の校正摺だけでも、病中の慰みに見たいとは、たしかに同情すべきである、河喜の梓は如何、河清可埃やうなり、河喜では無うて、河清を埃つやうなものだとのシヤレも山陽先生らしく、詩鈔は漸と天保四年三月の發行となつた、松陰の序も出來ずじまひで、詩鈔の鑄成りて人は已に仙せり、香を焚いて先づ玉樓の魂に奠すの詩を作つたのは、手おくれなる哉、小竹の序は非常に氣に入りて、詩鈔の卷頭には、山陽の批正のまゝが刻してあるのも面白い、それよりも心がくりは政記の事、通議の事であつて、山

陽未死の大精神は、此手紙のうち、に歴々と現はれてゐる。

机、附貴价い、よく見ればヤハリ粗末にいへ共、高きものなきよりましなるべし、此机に付い、硯匣、卷紙、小蠟燭立の類、御定置、度々取寄ぬ様に被成、或は此机にさらさ大風呂しきなどをかけて、其下に脚爐なりと何なりと、自由出來可申い、安神降氣以遇門弟子、是亦自愛計壽の一端也、放人囑意、御深領可被下い、

九月 既

關原、井伊退き、福嶋進むの刻

裏

小 石 様（頼山陽先生手柬）

これは、小石元瑞への形見分けのつもりなるべしと想はる、山陽の主治醫は小石の外新宮涼遊なども匙を取つた人で、

連年肺疾素難醫。痛想先生咯血時。一燭熒々風雨夜。

壁間空見乞藥詩。（關原齋詩鈔）

といふ詩がある。

十七日、小竹は見舞に來てくれた、喜んで吾が友の聲を聞き、疾を力めて咲つて

相迎ふ、……酒あり君姑らく住まされ、觥を共にせざるを嫌ふな。これは多分詩の絶筆であらうとおもふ。

x
x x
x x
x x
x x
x x
x x
x

頼山陽先生は天保三年九月二十三日の未刻より漸次危篤に陥り、暮六つ時終に日本政記を起稿しつゝ、眼鏡をかけたまゝ、パタリと筆を投じて、息を引き取つた。

兒玉旗山、牧百峰、宮原節庵の三人は、この前後門人總代として萬事を取まかなひ、さし當つて江戸へその訃者を傳へた。

先生尊大人御儀、兩三日以前より御疲勞段々相増し、今二十三日未刻より御危篤に相成ひ、暮六つ時終に御辭世被成ひ、案外火急の御義、奥様始め皆々奉驚入ひ、扱て残念千萬、申上様も無之次第に被存ひ、尤御辭世前に小石も早速相見ゆ申、診察可申上ひ處、何分最早事去り、御療治無之事に被申聞ひ、就て御葬式の義は、小石始め一社相談の上取計可申積に御座ひ、委曲は逐て可申上ひ、先は早々御知らせ可申上迄に如斯御座ひ、以上

九月二十三日六午

兒玉三郎

牧善助

宮原謙藏

頼 餘一様

廣嶋へは十月朔、八つ頃、京の大變聞ゆる、白嶋(杏坪留守邸)へ小石より爲知來る、佐一郎(采眞)當日に此方へ來り居り、出る所へ白嶋より右狀持來り、追付立歸り申聞ける、常太(立齋)居り、夜乗船上京と梅颯は日記に認めてゐる。

二十五日、菩提寺の光林寺(綾小路千本通西へ入南側)にて葬式を營み、遺骸は夜に入りて東山長樂寺の後山に埋葬せられた、これは光林寺の墓地卑濕につき、遺言の通り執り行ふたこの事である。

葬式の行列は、遠見、白張を最先として、棺(六人昇ぎ)の左右には關五郎、菅三郎附添ひ、又二郎、三木三郎の供にて、以下天野俊平、聿庵代末、森三輔、畑十左衛門、小石元瑞、小關亮藏、後藤松陰と宮原謙藏と、牧慧齋と久保元瑞と、村瀬太乙と兒玉旗山と

は兩人づゝ立並び、牧文吉、秋吉雲桂、後藤左一郎、齋藤良策等以下門人故舊、最尾には長喜庵義亮と建仁寺の丹山跡供となりて一般會葬者これに續き、非常な盛式であつたといふ。焼香順は又二郎、三木三郎、聿庵の代香末森、陽子同萱、梨枝子同關親類惣代同天野を始め、門人松陰以下及び通學門人雲桂以下これに次ぎ、水野越前守家來、九條家諸大夫などもその内に見ゐた。

葬式終りて、二十六日、矢張り牧、兒玉、宮原三人連名にて廣嶋の達堂宛にその模様を報じ、御母上様御驚愕、御氣分の御障りにも相成不申哉と、此のみ噂仕居ひ事に御座ひ間、場合宜敷様御聞可被遊ひ、餘一さまへは此方より已に申上置ひ、扱此度世話いたし呉ひ内にも小石、春琴、鳩居堂三人は爲其最者に御座ひ……」どの文面であつた。

閏月十九日御狀、當月十四日に届き、かたじけなく拜見いたし申ひ、……然れば御示しのごとく、久太郎義夏以來病氣に御座ひところ、養生相叶不申、つひに九月二十三日、相果てひ、道路は隔り、ことに向に病氣の様子、ふかくつゝみ、かやうの事になりゆきひとは夢にも存じ申さず、菊の花さくころよりは、

おひくゝよろしくいはんれど、大病後の事ゆゑ、歸省の事は、醫師さしどめひの間、據ろなく當年は得下り申さずと申して、相果てひ四日前、十九日まで、自筆書狀おこせ、文体も一向何もくゝかはりひ事これ無くひところ、右の仕合にて、誠に急なる事かと思はれひところ、不治の症にて、これ有ひよし、さてくゝ残念なること、尤幼少より病身に御座ひて、たぬす案じられひの所、學事など相勤ひことは、根氣もよろしく、どこぞによき所あるならん、病身なりに、ながらへひこともやと存じひ所、是非もなきこと、愁傷の段御憐察下さるべくい、餘一ことも旅の空にて、別てくゝ心ぼそく、力落し居りひ様子にひ、まづくゝ本年は餘一歸國いたしひ間、何卒ながらへ相待ひはんと、そのみ力にいたし居申ひ、山陽あども子ども皆幼少にて案じられ申ひ、この後の所、御心添下されひやう、御たのみ申ひ、……

十二月二十六日

頼 梅 颯

後藤 俊 藏 様

追而篠崎氏へ、御序の節よろしく御傳へ下さるべくい……(山陽外史小傳)

(二十二) 文星 墜つ

一七三

(二十三) 回顧のかずく

一代の文豪は今將た見るべからず、文壇に吹き添へる秋風、頼に蕭殺の觀を呈するにつれ、在りし昔の山陽先生を追慕せずには居られなかつた。

追悼の詩文は小竹詩佛、山陽生前再び東遊の事を言ひ送つたに對して、拙堂、磐溪、雲華(歸國中)、花亭(岡本)、雲滄(鷹羽)、狷庵(野本)、檀園、星巖、涼庭、細香、珮川、隨齋、鹽田、穀堂等の諸友人より續々神位に奠せられたが、野本狷庵は聿庵を訪うて山陽の遺像を展し(義亮の筆)、その額骨が高過ぎ、頬が削け過ぎ、面が短過ぎると言つたのは、略血後の肖像であつたからであらう、それにつけても聿庵は山陽の風采をつくりだと言たのは、世に傳はる山陽の肖像畫を見る上に於て、好き参考である。

山陽の肖像は京都頼龍三氏方に傳ふるものと、頃日大阪森下博氏の有に歸したものとが雙觀である、森下氏には三樹の題賛、山陽自贊の一首だけがあり、殊に床しい幅である。

山紫水明處は今もさながら保存されずに保存されてある、故森田思朝君は山

陽研究で名高かつたが、著者は明治二十七年一月二十七日付にて、この建物の現況を實見のまゝ、同君に書き示し、それより迭みに山陽の事歴を語り合ふ因みとなつたが、現今のもやうを知るには、近日の大阪朝日新聞京都附録の記事が、何よりも近路である。

山紫水明處

京都は東三本木丸太町上る東側に細き路次口がある、この路次口をズツと奥に通ると此處は鴨川の護岸、此川際に小やかな藁葺の棟、藁葺は左して古くはないが全體の建物は随分と古い、是は故山陽先生在世中の書齋四疊半と二疊と而して水屋とで一棟となつてある、この書齋には山紫水明處の雅名がある、今でこそ山紫水明の文字は諸方に用ひられてゐるが、山陽の所謂山紫水明處とは即ちこの書齋に命名したのである、室の天井は葎の突上げで最も風雅に造られ、その小閣には山陽在世中から傳はつてゐる野梅、梧桐、樅の木があり、年々季節には芽も出で花も咲き昔も今も色を遠へずますく、太くまますく發育して藁葺の棟と共に山紫水明處の倂を保つてゐる、全體この一棟の地に接續する二百餘坪の地には普通の家屋あり、これには人も住んで居るが、其普通の家屋は山陽在世中の建物ではない、中頃建て直

されたもので、在世中のものといへば右いふ一棟の墓葬と周囲の植物、而して庭石位で他は皆新し、この二百餘坪の地所の外、蕨茸の一棟と樹木庭石とは山陽物故の後六十年間入手に渡つてあつたを、遺子支峰翁は父山陽の終焉地なり、亦自分の誕生地なれば是非之を取戻したいとの切なる思をして居たが、意の如くならず、維新後京都の國手安藤精軒氏の有となり、氏は此處に施藥施療所を設けて數年こゝに住居し、支峰は意を果さず永眠した、その息頼龍三氏は何卒して亡父の遺志を實行せんと考へしも家計許さず、常に遺憾として居つたが、恰度今から十年前、安藤氏に交渉し、遂に此地所全部と建造全物を我が手に入るゝ事とし、其後は現に頼龍三氏の所有となつてゐる、龍三氏はセメてこの山紫水明處を永代維持せんと考へから、普通の人家は他人に貸し、山紫水明處の爲、入口を右いふ路次に設けて、今では常に路次の入口も、山紫水明處の一棟も締め切つて無住となつてゐる、故中井櫻洲の在世中、龍三氏の父支峰翁に山紫水明處を頼家の有に歸し、こゝに山陽の像を安置し以て先生の遺跡を維持保存せよと勸めた事あり、旁支峰翁は是を我が有となさんと思ひをりしも、右いふ如く遂にその意を果さず永眠せしゆゑ、當主龍三氏は亡父の遺志を繼ぎ、この遺跡に先代の像を安置し、遺跡と共に永く保存し、時としては詩人墨客に限何り、か雅會の備しでもあれば、望みに應じ貸しても好い、只懸念に

堪へぬは萬一の火災であるといつてゐる。(鹿)

山紫水明處の保存法に就ては故中村確堂(栗園の繼嗣)の文章もあつたが、それは實行されず、今日迄未了の問題として残つてゐる。

山陽先生の遺徳は、維新後ますます發揚せられて明治十四年四月二十四日、支峰の主催にて五十年祭を洛東迎賓館に行ひし時には、同三月二十一日辱なくも祭案料金百圓の御下賜があり(龜谷省軒翁の上書與かりて力あり)明治二十四年十二月十七日には、特旨贈正四位の御宣下を辱うし、翌二十五年三月二十一日には、京都の當主頼龍三君の主催にて、同六月十九日には廣嶋に於て贈位奉告を兼ねて祭典が行はれ、故河野小石の講演があり、その記念物としては焜蒿餘情といふ冊子が頒られた。

山陽の影響は近古學者中、誰とてその右に出づるものなく、生前に於ては早く既に日本外史寫本の傳播が意外に廣く、偏強なる曲亭馬琴ですら、外史の寫本から勤王小説俠客傳著作の動機を得たらしく、一時盛行した大槻磐溪の近古史談も儘かに山陽流のやり方であり、門人岡田鴨里の日本外史補も、隨分讀書界に知

られ、鹽谷宕陰を通しての影響は本文にも言及如くで、謹嚴なる中村敬字の如きも、雄才大略は秀吉治國安民は家康文章は則ち山陽だと積極に言ひ放つてゐる、無論山陽の反對者は佐久間象山以下多少はあるやうだが、それは齒牙にかけるには足らぬ議論であると斷言するを憚らぬ。

山陽の學統は、靖獻遺言の著者淺見綱齋より筋を引張るのが適當であるのは言ふに及ばぬが、母の梅颯の父飯岡義齋も同じく其學統であつて、鈴木貞齋の門人であるのも奇縁と謂てよい、尊王愛國、大義名分の血の塊りは、何うしても山陽の頭腦を形造らずには居らぬのであつた。

山陽の門人は、その分布非常に廣く、松陰、旗山、節庵、葛城、百峰、南宮、藤城、藤陰、東山（川上）、鯉水、節齋、鴨里、宕陰、朴齋、太乙、竹外、白巖（野本）、竹下、箱庵、家長、竹坡、細香等は、最も著るしい顔觸れであつた。

山陽の氣節は、森田節齋に傳はりて、その門下生は、外ならぬ山陽の子三樹と共に、國事に奔走して、尊王賤霸の一大主義の前に身命を抛つたものが多く、維新の忠臣として、芳名を永く史上に遺したのである。

それで今歳の八十年記念としては、大阪府立博物館にてその催しがある筈であるから、この小著述も、その記念として發行したいとおもひ、八月十七日より着手して、諸處で講演した速記を整頓補訂したのであるから、文字の粗鹵は素より、まだく増修を要すべき點も多く、著者の山陽研究はこれから先きの事業の一つに豫期してゐる譯である。（辛亥八月廿二日、稿了）

頼山陽と其母畢

●一時雨と村雨

(山陽八十年記念祭)

秋晴れの昨日、山陽遺物展覧會を開きつゝある博物場に於て住友、藤田兩家を始め知名の人士贊助の下に山陽八十年記念祭が行はれた。側正面には翠簾深く垂れ、床には東山義亮筆三樹三郎贊の山陽畫像を懸け、香燭は典雅に町重を極め、花は鳥兜の紫、紅の芙蓉、白萩の彩り、青竹の提籠には熟菓堆かく山野の色を盛る。煎茶席に入れば先づ欄間の「一生齒のぬけぬ薬」と刻り附けた看板の裏に認めたる山陽の筆なる「夜梅千樹月明郎」の扁額を掲げ、床飾、茶具みな山陽に因めるものを蒐めたる中にも永樂の秋草模様染附の茶盞に揃んで出す茶は「一時雨」菓子には「村雨」木米作の雲鶴寫しの盃に盛られたる、此催しに相應き名の時雨村雨にも深い由が含まれてゐる、山陽が尾の道の橋本家へ送つた手筒の中に「煎茶道具一式を京で調へその茶壺へ茶を入れてあるが少量故馬場綾小路のやから取寄せて呉れ茶の銘は「しくれ」菓子は「村雨」といふ意味が認めあつたに據つて手操て見れば今も一時雨と共にみのやが榮つてゐるを尋ね出した蓋いどころを喫らせ、村雨は何處のものとも無いによつて當地で作つたといふ疑り方に三百の來參皆首肯く、午後三時よりは木崎好尚氏の「山陽」の講話聽聞の入百疊敷に満ちて盛であつた(明治四十四年九月二十四日、大阪朝日新聞)

●山陽記念祭茶筵

府立博物場開館中の山陽遺物博覧會を好機として昨二十三日は翁の八十年記念祭當日につき同場内衆樂館に於いて茶筵を催せり記念席床には東山義亮筆山陽翁肖像に贊山陽作詩三樹三郎書(森下博氏藏)の軸を掛けて祭壇を設け香花果物等を供し講話席には山陽書細字三幅對の幅(森下氏藏)と圭庵書の屏風(高木彌一氏藏)煎茶席には床掛物白河樂翁書懷紙題虫、古銅の香爐、黒塗共繪八足卓、南紀善妙寺燒木米造の花瓶、茶具は瓶掛木米青磁靈形彫、湯瓶木米ポーラ、水注朝鮮唐津、茶鉢木米交趾龍窠寫等(以上田村太兵衛氏藏)の飾り付けにて殊に山陽筆河合漢年のために題せし扇面は珍とすべく重なる來賓にはこの複製扇子を記念として呈せり午後三時よりは木崎好尚氏の講演あり聽衆多く盛會なりき(明治四十四年九月二十四日、大阪毎日新聞)

附 錄

新婚旅行の記

梅 颯 女 史

去年の冬、をものゝおしへをうけて、頼氏の家にかへる(歸く)。良人(春水)の父君(亨翁)は千里の青海をへだてて、あきの國(竹原)にいましける。かゝるはるけさかひなれば、拜み奉ることのかたく、まゐてつかへ奉るはいふもさらなり、明暮にこれのみわび思ひしに、はからずも今とし(安永九年)卯月はじめ二十三日、良人の弟君(杏坪)をぐしてのぼらせ給ひ、はじめ御おもて拜みまゐらせ、有がたくうれしさはいふべきかたなし。いつしかなれむつびまゐらせ、ひめもす御かたわらに侍るに、道すがらの御うた、あるは人よりこせしおもしろきふみども、くりひろげみせしめ給ふもうれし。ほどなく京へもふのぼり給はんとて、わらはら二人したがひ奉りて、みちくのみやつかへにはべりぬ。

八日の夕つがた、船をいだし、江(淀川)にさかのぼりゆく、岸の木立のながめも珍
 らかなり。夜に入りて、月いとしろふすみわたれるけしき、ぬならず。夜半ばか
 り雨しきりにふり、風すさびければふねかゝる。風爐やうのものようゐしたれ
 ば、さけなどあたゝめ参らせつ所はひら、かたにてぞ有ける、いひ、さけなどうる舟
 ども、たがひにらうがはしくのゝしりたるも、所がらおかし、あるじかくなむ、(この
 詩は春水の自筆)

半夜江行興可嘉。携妻扶老向京華。蓬窓雨滴不蕭寂。

百里離家如在家。

わらはも其ころを、

かぢまくらとまもる雨のわびしさも

まぎるゝばかりむつがたりして

こゝにてよあけ、とまをしあけ見れば岸のあなたの野山のわか葉のけしき、い
 はんかたなく、いとくゝめづらかなり。

それより、八幡山、さき行かたの山くゝのながめ、又なくぞ覺へ侍る。よどの城、

はしのけしきもめづらし、

此ころは初音やなかむはとゞぎす

よどのわたりの雨のなごりに

はとなくふいみにいたり、竹田とかやいふ道をゆく。うしはかごもたらした
 れば、めして、わらははらしたがりてゆく。雨をぼふりて道いたくあしければ、どか
 くあゆみがたく、人におくれて行ぬるを、心うくおぼしてや、わらずてふものはか
 せぬるに、あゆみやすくなりて、どこしへにかわりしすがたのおかし。漸く高瀬
 川のはとりをゆく。卯の花くだす折なればや、水の音もすさまじ。あなたはも
 いかやまとなん、やよひのころは、大空も花にぬふばかりなるよし、今はしも名残も
 なくちりいで、ひとつわか葉に青みわたるて、こと木にまがふ。とあるいはに
 しばしがほどやすらふ、見わたる山のたゞすまひ、本の木だち、かすめるがごと
 くくもりたるけしき、いとおかし。頓て立出過行ば、木の間くらくしげれるに、か
 たへは水のながれいときよし、ひさごもてくみなとして、

夏あさき岩間の清水たちよりて

ひすぶ手すゞしこけの下道

ゆきくゞてさゞやかなるながれあり、わたらんとするにはぎのぬれたらんは、
あゆみがたしど、あるじなる人きこへ給ひ、ぐせし人のいたわりて渡しぬ。のり
物はとくわたりぬれば、やうくゞとしてたどりつき、打むれてゆく。此わたりに
はうしくるまの物おふせて、所せくまで、たてならべたるあり、

おのが名ににすもあらなん荷を重み

くるまのうしのくるしげに見ゆ

ほどなく京地にも入しが、くるまのこゝら行かふに、折しも雨降りしきりたれ
ば、いたく道あしくて、はかゞしくあゆみもやられず。六條わたりには、先より
しれる人のやどりせるよし聞ゆれば、其かたをなんさしてゆく。

ほどなく、本願寺のかどもにもなりぬ、人してとはせ侍れば、三日ばかりまへに
かへりにしよしをこたふいと本意なし。わらはははは、此わたりめづらしく、御堂にも
ふでんとゆく。みどろの有さま、壯麗いはんかたなし。こゝは其かみどはる
のおとゞみちのくのちかの鹽がまをうつし給ひし所のよし、君まさでけぶりた

ぬにしはがまの、とよみしも、むかしにて、今は此寺の庭なん其あとなるよし、さ
だかにはしらす。

日もいたくかたぶきぬれば、三條あたりにさだめしやどりのあなるを、ちから
にゆく。きくなれし寺々も、いそぐまゝに立もよらで過行に、三條のあたり、大は
しにて、夕陽もにしにしづみて、くれぢかくなるに、かすみて見ぬわたる山々いと
ゆかしげなるは、みなゝにおふ所々なり。川のながれ、音しづかに聞ゆるもいと
めづらかなり。頓てやどりにつき、ゆひき、ゆふげいとなみなどして、古郷への文
したゝめぬ。うしも、ひめもすのながめにねぶりをよふし給ふ。庭もせは、ゆ
ふづく夜の影しめやかに、木の間をもりくるも、あはれにおかし、ほどなく夢をむ
すぶ。

けふは九日、うしのしきしまの道しるべせし、小澤、蘆庵、といへるは、かせのがり、
行なんど出行給ふにしたがふ、きのふには引かへ、そらはれ、いとのどかなるに、行
かふ人もにぎわし。あるじは、しれるかたとひつゞも、ゆきくゞて小さはのたち
へまふで、あないせさせぬれば、やがて出むかひ、わくらははにたいめし、かたみによ

ろこびをのべ給ふ。女のあるじもいで、なにくれといどまめやかに、ひるかれ
ひのいどなみなどして、もてなし給ひぬ。折から雨いたく降出ければ、けふはい
づかたへも行たまふまじ、緩々かたり給へなど、いとねもごろに聞へて、歌物がた
りのとりぐをいひきこへ給ふも、やんごどなくうれし。庭もせの草木も、おの
がまゝにしげりあひて、今ふりし村雨に、露置あまりたるけしき、住人がらいど心
わりげなり。もたらせしさへやうの物とり出て、しばしくみかはし、うし頓
て言葉の花の色に出て

いや高くしげれるかげやここの葉の

さかへをみするやどのまつが枝

わすれめやこころをのぶる言の葉の

みちしるべせしひとのめぐみを

あるじ、とりわへず子のこの千世はいふべくも侍らずとなん、いらへ給ひて

ながらへてゆくすゑひさに我門の

まつのことばの榮花をもとへ

わらはも、歌こひ参らせしが、いもどせのよろこびをのべ給ひて、祝の心をとな
ん

咲かゝるちぎりとならば藤の花

松のみさをにならへどぞおもふ

みな、短尺にかひつけて給はりぬ。かくしつゝ、日もなまめになりぬれば、まか
りなむ、これより大みや拜みまはしくといふにぞ、どくゑがきて道をしへ給ふ、い
どうれし、おもふものこして立いでぬ。

行くて、大内にいたり、かなたこなたの宮づくり、世つかずめでたけれ。みか
どの御所、おがみ奉るにも四つの海静かに、民くさなびく御めぐみ、かけまくもい
とたふとくぞ侍る。かなたを見やれば、雲の上人とおぼしくて、くぶの人々、遠こ
とにさうぞきてみゆるは、いづれの御かたならんと、人にとひ侍れば、九條關白殿
と聞へぬ。世の聞へめでたくおはしませば、拜み奉ること、いとくふとくもか
ほむ侍りき。

かへさにしれるかたにたづね、しばしやすらひ暮ちかくなるまゝに、やどりに

歸る。

けふもつとめて出なむと、更に井川氏、桑田氏を伴ひ行はせに、南禪寺の松林にいづる。此寺をよそにみなし、永觀堂は、心をすますかねのねばかりして、いと物しづかなるに、折からうぐひすの人くどなくも、心ありけなり。かなたに、藤の咲かすりて、やうく過ぬるも、おかし。花いとながく、うしの杖もてくらべ給ふにもまされり。岡にのぼりて見わたせば、遠近の野山、目のおよばぬかたまでも見わたたり、世の外のおもひきふかし。かゝる所にては、心のはどものべがたしなぞ、たわふれもて行かたの木の間、目をさふるばかりにしげり、折から道しばまで、露けきさまいと哀なり。此あたりには、山崎先生、關齋の御墓あなるよし、あるじは詣たまふ。

かくして黒谷を過行、聖護院のもりにいたる、木かげの茶亭にやすらふ。此あたり年ごろあるじのまなびの友とし給ふ人の、旅のやどりにおはしますを、どむらひ給ひ、頓て過つゝ行手なる小川をわたりにしきおる家居などたつぬ、女の馬おひて、さがなく物いひわたたり、行かふもおかし。

みどりの木の間、竹の林を過ゆけば、北のふみやしろにもふづ、神の御めぐみ、とりくぐなれど、わきてひぢりの道をふかくまもり給ふとかや、わらはが父も、夫もひたすらに此道をのみしたひ侍れば、いといたうとくめうがあらせ給へど、おがみ奉る。紅梅どの老松も物ふりてみゆる、わづかの道を行ば、清き流れあり、番や川と聞ゆ、いとあさければ、人々掲してかりひたし、かなたこなたつとひ遊ぶ。

いづくより流れて秋の通ふらむ

番やがはらのみづぞすしき

これにかゝれるを、高橋となんいふよし、わたりにて平のふみやしろにもふづ、御宮居いとかみさびてみゆ。夫よりもと來し道にかへり、又大みや、拜み奉り、ほどなく加茂川に出る。古郷のつとにとて、石ひろはんとすれど、すがのねのながき日さへ暮ちかくなるまゝに、たどりくゝて、やどりに歸る。きのふとひ参らせし小澤氏の御元より、老のなぐさめにとて、菓子やうの物給ひぬ、わすなむみつの浦はにかへりなんとて、何かれといとなみものす。

みじか夜の明やすき、ねぶりいまだなかはならざるに、鳥のあかつきをつぐる

にぞ、起出て手あらひくしげづり、朝げなどしたゝめものして、此ほどのやどりに
だに、名残おもはれて、

草まぐらかりのやどりも今はとて

おきわかるれは露ぞこぼるゝ

夫より白川をみつゝ、智恩院にいたる櫻のはやし青みわたる、花の比さぞとゆ
かし。山門はことにむね高く、とぶ鳥のつばさもさふるばかりなり。朝まだき
行かふ人めもまれなるに、さかをのぼり、御堂にもふづ。いさゝかの岡に鐘樓あ
り、洪鐘かゝれり。みつゝ猶ゆけば、おん林にゆく、若みどりの心よげに繁りあ
ひたる、いはんかたなし。御社にもふで、行くゝて、やさかのたふをも過つ、清水寺
にいたる。とつ國の人あつまりて、順禮の歌となふるあり、舞臺といへるは、いた
くあれて、はしによりあがたし。順てあらたにつくるめると聞ゆ。山いとちか
くあふぎて見るも、いとみじ。音羽の瀧なん、世々の歌人の、この葉しげき所
なりけらし。わらは幼かりし時、もふで来て瀧をもみしが、此ほどはうしのあゆ
みをいたはり参らせてゆかず、木がくれなる細道をゆく、いと心ぼそし。此ほど

りを鳥邊、山といふ、やがて大谷にいたる。松におどづるゝ風のみして、さらに人
めまれなり。うしのゆかりのれいしますすよし、拜み、ほどなく大佛殿にゆく、お
さなきよりもおがみ侍れど、今さらめを驚す。こゝかしこに立やすらふ違つ國
より伊勢もふでのわらはなるが、あつまりて物をこふ、此はしらのひまくゝりな
ば、あしとらせむとの給ふにぞ、みなとくゝりて、さらば給はれなど、まつわれい
ふも、いとけふあり。ひとくゝりゑず、いかやと心づかひせしに、いひもる筈
のふどころに入たるが、さゝへられたるにてぞ有ける。

やがて出つゝ、行手なる池にかきつばたの、げにもゆかりの色に出て、咲みだれ
たる、いはんかたなし、吹くる風も、にはふばかりなれば、あやにくにたゝまくおし
く、こゝにしもしばしやすらひて、

衣手にすりてもゆかひかきつばた

ゆかりの人のかたみともみめ

さてしもあらねば、行まゝに、深草の里になりぬ。こゝにはわらはべの手ずさ
みなと、世わたりになす家おほし、あるじ、おさなきものに家づとにとらせんとて、

もどめなどす。みづからには、さばかり思ひ侍らねど、うしの折々は、こしのもとよりおも見給ひて、玉ぼこの道すがら、いとほはるけし、何にかれやすがもどめて、やすらひてよと聞へ給ふも、こよなふうれし。

泉涌寺、東福寺をもみやりて、行かたにわけの鳥井のみゆるは、いなりの御社なめり。やがてもふで、かしく拜み奉る。山の葉ごとの夏木だち、猶わかずめづらし、こゝにて藤井何がしにも逢ぬ、此ほどの言種ひとつふたつ、いひわたり、難波にてこそかたりつくさめとてわかれぬ。

とある谷むまやに、しばしがはどやすらふ、かくしつる内にも、時うつりなんとて、いそぎ打むれて行。かなたより、その人におもかけのいとよくにしがみゆなど、いひもてゆく、ちかづきて見れば、日ごろむつびぬる橋本のぬしの、妻子つれて、あふひのみわれおがみにとて、ゆくなり。かりそのにも、おもふことかたりて、またもゆきて見んやといへれど、たわひれんもよしなしと、名残をしみてわかれぬ。

いつしか、ふしみの渡口にも來ぬ、何かとしたゝめものす、舟は井川氏の出し給はりぬれば、はかにのる人なし。時はさるのこくばかりなり、深草にてもどめし調度も、もの煮あるはようせし茶など、たてまゐらすも、なぐさめのよすがどはなりぬ。日もたかければ、こゝかしこのながめあきもせず、なをめぐらし。よどのわたりも、いつこやらん此わたりちかければ、夜ふかき頃にはあらねど、ほととぎすどきかまほしき。そこより南のかたにみわたるゝは、八はたの御社なめり、まゐることかたければ、こゝより拜み奉りて、

ゆく末をかけてぞ頼む石清水

神のちかひのめぐみあふぎて

山さきもすぎつ、此わたりにて暮ぢかくなるまゝに、もとの木だちもおほくしく、遠こち寺のかねのねに、けふもくれぬと驚く。はた夜に入て、雨もよふすど、ま打おはひ、ゆふ風のいと涼しきに、うしのはださむからん、あがふすまに入てよど、おとせきこへ給ふも、有がたくうれし。漸々ふくる比はひ、ぬるともなく、さむるともなきに、さほさす歌のはのきこゆるも、旅のあはれをもよほせり。さしゆく舟のときを題になして、歌よめと仰せらるゝに

かへるべき難波に早もつきなまし

水のころにまかすかはふね

月のかつらもきよくすみわたる、實に夏の夜の霜とかや、しまねの松にさへられて、ずへの、里もおぼろげなるが、どがひる犬の聲にこそ、そこはしりぬ、江口、ながらも此わたるならん、今はむかしがたりの、うかれ女の舟だに見ぬす。かくしつゝ行まゝに、いつしか難波につきて、めなれし橋のかすく、かぞへくゝて、うしみつる比にこそ、家路にかへる。(竹原、頼俊直氏藏眞蹟本より謄寫)

補 遺

▲外史の起稿に就て

日本外史起稿の一節を補ふべき資料を、今回大阪府立博物館に於て開催の頼山陽八十年記念展覽會の出品中に發見し得た。外史の著述が、あらまし目鼻がついて、母の梅颯に稿本を差上げたのは、二十三歳の十二月十日であつた。右の資料は、十月十日附で、友人武元北林へ與へた漢文の書牘(岡山、岡上氏藏)である。その中に外史起稿の事柄を詳しく書いてある。

右の書牘に據るに、幽居中、司馬遷が史記を著はす時に、任少卿に與へてその起稿顛末を詳しく書いた書牘を讀んで、慨然として思ひ立ち、先づ平安朝より始めて鎌倉、室町、安土、大阪と覇業興亡の跡を論じて「八議」といふ史論を作り、次に興地、封建、官制、兵制、財用、法律の沿革を詳かにして「六略」と題し、次に「二十三策」といふ政事的意見を著はし、次に「十八紀事」といふ保元以來の紀事本末を述べ、最後に北條、毛利、武田、上杉、織田、豊臣諸將の傳を作りて「六將傳」と題する趣向を立てたとある。

即ち新策と日本外史とをチャンボンにしたやうな一大成書を仕上げる計畫であつた。

この書牘の日附に、十月十日とあるは、山陽二十三歳——幽居中、著述物を母の梅颯の手許迄呈出したといふ二十三歳(享和二年)の時か、或はその前の年かは確然と分らぬが、書牘中に入議、六略、二十三策の三篇は已に出来上りて、十八紀事と六將傳は全く脱稿せぬとあるのを見ると享和元年二十二歳の十月十日かとも認めらるゝ。何れにしても二十二、三歳頃の書牘であつて、新策と日本外史との底稿は、此の青春時代の産物であることは明白である。

▲両替町の家

文化十二年に移轉した京両替町二條下る處の新宅のもやうは、左の手紙でよく分る。

……小生も両替町と申へ移居仕……今度移い處は、洛中第一のじだらく町にて、じだらくものには相應仕。多隙地、此節は日々携鴉嘴、鋤荒栽樹花

鏡一部、不離几案。舊寓木屋町は景よすぎいて飽申。其上いつもく河原に日のあたりたるを看詰居いて、眼精あしくなり、精神も散越仕。夏は炎沙の氣難堪、涼しければ川風逼膚、病羸には大にあしく覺申。東山鴨水には別れあしかりし、されども此度の讀書樓前、樹竹陰翳、四時花開、在城如在野も頗娛心。此節茉莉盆栽、每浴後花開、清香滿軒、夏のものに御座。

御所置御座。昔は高さものなりし、今は甚廉に……

この手紙は備中長尾小野節氏の所藏である(靜思餘錄、日付はなく、同氏の祖小野招月亭主人(泉藏)に宛てたものである)。

▲山紫水明の意味

山紫水明の四字は、時刻を指して言つたもので、土地に當てたものではなかつた、三本木の住居は、山紫に水明るき日の入り前のけしきを誇りとする意味から、主人山陽は、この好字面を拈出したのであつたのを、いつから誤まつて來たものか、京都の土地が山紫水明だと言ひならはすやうになつたのは可笑しい。その證

據は、山陽の手紙に「山紫水明の頃」といふことがよく書いてあるので分る。

▲入京早々の氣燄

爽大人(春風)九月三日出の尊書、儀卿兄(石井豊洲)より、重陽前一夕之書、又念三日之書、連綿達來い、其節秋冷之御障も無之、奉賀い。寒威相催申い、愈御安泰被成御座い哉、承知仕度奉存い。小子、秋冬之際、播州姫路に馬場三郎右衛門と申、近年門人に成い男有之、舊家にて酒井侯へ用金を出い十六人衆と申一人に御座い、此男より遊山旁、鳥渡下りい様申越い故、幸門人も往々歸國、講帳頗閑なる時分にい故、鳥渡下り申い、加古川中谷(三介)にも往返一兩日居申い、案外、長滞留にて、此間歸京仕い。今少の事にいへば、鳥渡歸省とも奉存いへども、茶翁様子も未熟書信さへ未通い事にいへば、西望悵々罷歸申い。此行所獲大分御座い、此度は不帶歸、皆々アチラへ預ヶ置申い。此趣にいへば、京住困窮も無之い故、廣大人(春水)など御安心被下い様、御傳奉希い。詩は俵にして、海運にて廻しい程出來、皆々被頼申い書讀類に御座い。茶翁へ此間發書、十首許小詩抄錄遣い、定て御傳覽可被下奉存い。

此度も任貴命、少々錄上供一粲い耳。歸りいへば、直に講會相始、門人詩文など溜居い物、雌黃無寸暇い。彼翁、此度も赤穂鹽など土産にして參申い、父子(三嶋、小竹)青眼若舊い。翁三嶋、屢鑠依然にい。少しは年の氣も見へ申い、書などは益見事にい。海内にて家君、古賀翁、侏は這翁と奉存い事にい、草堂と申ものを編かけ居被申い、○栲亭、村瀬、依舊往來仕い、京には這翁一人にいへ共、傲兀には困申い。其他小儒無數、不足上齒牙、扱も衰いものにい、江村賜杖堂(北海)の詩會、今に清田(梶之助)自注、龍川去年物故、其義子也、方にて不絶如綫御座い、詩の好惡無判者い故、私に出てくれと申事、其衰如此御座い、盛なるものは畫人也、不埒物の豊彦、唯今月溪の跡には一人と申様に被用い。其内露次に愚山(松本)あり、其中は屋主の原田檢校と申もの、何ゾ叔母などを盗みい者ニテ無キヤ、同氣相求とはヨク言タモノと申い、一笑。

右尊書も、高砂より、直に姫路へ届來い、菅武、醫ハヤリい由、此度も參差不相逢い。

先は右御答迄草々若此、年内餘日無之、來陽日出度可申上い、不備。

十一月二十六日

襄 拜

入京早々の氣燄

一九九

春風老大人

儀卿老兄

尙々、惡詩懸御目の様に、本文申上しへ共、是も茶翁傳つとに上し方、可然と茶翁へ遣し。

道光上人、私播遊の跡も在京、十月中に紀州の故郷へ廻り、然後西歸と承し、廣嶋邊被寄しにや。

大人(春風)賀尾藤(二洲)退隱尊製、儀卿より惠示、如拜慈顔、莊誦仕し。御筆力御衰無之所は、金山への書面などにて、遙察仕し、此上ナガラ千代もと祈る御事に御座し。

關白殿より、書贊被仰付し御挨拶に、拜領仕し扇子、金山へ頼上申し、届し事ニヤ。

左様カト存しへば、此間は祇園ノ一青樓主人ヨリ、一相識の儒生を介トシ、樓上之十二景詩ヲ乞來し。峻拒し所、某先生々々々も賜詩しと歴舉致來し。都會には様々の事御座し者にし。(安藝、中嶋部氏藏)

▲三樹命名の由來

頼三樹の誕生のとき、名前を付けた折の考證は最も面白い。廣嶋の老母梅麴宛の手紙に、

……扱梨影事、五月臨月の處、月末迄何事も無之のびひ哉と存し處、二十六日の寅刻、至極平産、うぶ聲大丈夫に御座し故、例の男子と存じ、尋問も不仕、参り視しへば、果して雄雛に御座し。辰辰之助、又又二郎同様の顔付、同イカダ模範イカダ自注注と申し、醫も咲ひ申し。梨影杯は、先君(春水)の事は存不申しへ共、竹原大人(春風)によく似居申し杯と申し。腹に久しく居し故か、通例よりは大に見へ申し。無病無毒と相見へ申し、乳も相應に出で、又又二郎の乳母にも手傳せして、此度は又藏又二郎同様にウブ肉落不申し様にソダテ可申と申居し。是にて辰辰之助のかわり(死なせた代り)出來して、先づ本々に算用もどり申し。是迄の内にて、スツバリと致しよき子にて、懸御目はは、嚙御喜び可被遊と申値し、……昨日七夜にて、其前日、京語、六日ダレと申して、其日をおもに、

三樹命名の由來

穩婆醫などに酒など出し、七夜は餅くばりなど、面倒の世話共、おやぢも無據ウロタへ申ひ。度々の事にいへども、無如何い、何卒是にて産と云事も、子と云事も、止に仕度ものに御座い。藏の字、例にいへども、止めに仕り、又藏は又二と改名、餘一(聿庵)より續きいへて、よろしくと存い故、此度の子は、何と付可申哉と存居い處、日野様(南洞公)より、其翌フト瓢にて酒を賜りい。貴人故、鯉伯魚の例にて、酒の事と存じ、其酒、八文字と申印にい故、造酒八と名付可申と存申い。造酒の字は、官名ヲ填いへて、みきと申は、古言の酒の事、萬葉などには、三寸トモ三木トモ書てあるかど覺申い。呼聲のみなれば、字は何にても書やすきがよろしくと存じ、三木八と可仕、私年四十八(六の誤)にい故、此三字にて字畫其數に相成、又三本木にて、文政八年と申事にも通ひ可申と奉存い。

造酒八——三木八の由緒來歴、面白しども面白し、酒を八升祝ひに貰つたからと言ひ傳へられたのは、此の手紙でスツカリ間違ひが分つた。

全体、三木藏とも存いへども、三千三にまぎれ申い故、如右に仕い。且、藏字不吉例故、改め申い事にい。

京ノ太鼓持、八字ヲヨク付居い故、如何と申いへ共、ソレニマギレル氣遣は無之事。太鼓持ニサヘ、ナラ子バヨロシク、又京ニハ、儒ニテ太鼓持同様ノ人多クい。名ばかり似いへて、實似子バ、ヨロシクと申い事にい。

讀み來りて拍案驚奇の妙がある。生れ立ち他の兒よりも立優りたる大丈夫、流石は他年勤王志士の領袖として名高い三樹先生。太鼓持同様何八と呼ばせて置いても、ソレニマギレル氣遣は無之とある文面、水際立ちてをかしく、太鼓持のやうな儒者はいくらもあるぢやないかとの罵倒の妙、何と評して好いか分らず、愉々快々。

この手紙は、廣嶋縣賀茂郡吉川村の中嶋菰氏の珍藏にて、特にその原文の卷に仕立てたるを送り示されたもので、日付は六月三日(文政八年)と認めてある。洵に山陽手紙中の白眉ともいふべきものと思ふ。

▲梅の歌

「頼山陽先生手束」の藤井雪堂へ送つた手紙のうちに梅の歌が二首認ためてあ

るのは珍らしい。

園の梅まだきながらに手折來し

君がこころの香を匂ひける

あふきみし日は入果つ春の夜の

あやなき梅は咲かひもなし

▲新夫婦の教訓

天下の絶品たる山陽の手紙のうちでも、母に對する手紙は、息もつがれぬ快感を以て讀まるゝのである。左の手紙は、國元に殘せし山陽の長男聿庵餘一が藩の京留守居役寺川茂司馬の妹、臯子^{さほ}を娶つた新婚早々の祝ひの手紙で、一つの教訓として讀まるゝものである。

……新婦無滯到着、内伺も速に相濟、八日(婚禮は八月八日)に婚儀首尾能相調由、新婦爲人も御氣に叶ひ様子に申參、居合も可宜と爲祖先、爲家、爲國、御同慶仕い。何卒此上餘一心得にて不溺牀席之愛、保身養生二字、即ち御妻克家

之計にて、長久之基に相成、遯卦之象占、平生觀玩爲戒い義、第一に御座い。此女子相應に標格^{まじやう}も有之、仕拵も十分、何不足無之處、自身の心にも挟み居可申、且健克の相なきにあらず。善御之則終始婉順、不善御則陰克陽様に可相成い。此段骨肉ならねば申さぬ事に御座い、唯目出度く、と而已申聲ばかり到耳い、此苦言を申ものあるまじくい、……

この手紙は、氣勝ちな新婦の教訓が主意で、山陽の手紙として非常に硬過ぎる方であるが、それでも末の方は大碎けにくだけて、

此の度婚儀祝やら、御飲料のために、御氣に入いと被仰下い、白雪五升獻上仕い。外のものに飲ませず、御一人被召上可被下。時節よろしく相成い故、道中も氣遣なく、御たばひ(貯へ)被遊いでも、あしくはなり申まじくと、チト餘計差上申い、(大阪、本山産一氏藏)

などは真情の流露した書振りである。

▲母のお慰みに

左の手紙は廣嶋と京の兩家の子供の事から書き起してある。老母の心を慰めるのは、孫の話が一等と氣附いたからである。

……新婦産後、愈何の差モツレも無之ハ哉、此方大小無異、又二少々引付之義は、先便に申上ハ、其の後已に一月程に相成、平生に復し、元氣に遊居申ハ、三木八、一點の申分無之、自哲肥大に成長仕ハ、萬々御安心被遊可被下ハ……

新婦とは右の聿庵の妻臯子である。去年文政八年十二月二十日に長男秀藏を生んだので、その見舞を述べ、次に又二の支峰先生が常年四歳であるが、引付も直り第三木八の三樹先生は、まだ二歳の乳呑兒で、これは申し分なく生長したどの便りである。

此の地、花は不相替にハへ共、山櫻は兎角不出來にハ、嵐山は十三四日盛りにハ、詩禪夫婦上り、私方に兩三日滯留にて、嵐山へも同道仕ハ、笠山夫婦同前、仙臺人長崎戻りのもの月琴など引申ハ

詩禪夫婦とは美濃の梁川星巖、紅蘭夫婦が長崎歸りの途、來訪したのをいふので、大倉笠山、袖蘭夫婦も嵐山へ同行し、仙臺の同行者が花見の席で月琴を弾いた

といふのは、星巖の詩に「島元二生摘月琴」どの前書きがあるのによく符合する。

吉野へ常太(頼立齋)私方門人同道参りハ、十六日に着ハ處、一目千本ニハ二三本ナラデ無之、奥院邊にもチヲホラ、扱も不面白、籠廻りをいたし歸りハ……ウソと云鳥、櫻の苔を喰落し、別してさみしくと申居ハ、左ハへば、先年御ども仕ハ歳などは、先づ好き方と相見ハ申ハ

これは文政二年の春(山陽四十歳)梅颯を奉じて吉野の花見を催したが、花が過ぎて居つたので、その言譯け的に、今年も花は不出來でござると申送つたのも、矢張り母の心が慰めたさの筆法である。

智恩院、鴨など一度宛参りハ、何方にても御ども仕ハ事共存出ハのみにて、他人は不知事、獨悽然之方にハ、アハレ近處にハは、毎春奉迎度ものに御座ハ、いよく出で、いよく妙。

景樹、病後一度本宅へ尋ハへ共、間違逢不申ハ、カノ御稿本近々取返ハ積に御座ハ、コマリタル懶惰人にハ

香川景樹は、山陽の友人にして、同時に母の歌の師匠である。いくら國元の母

から頼まれて、景樹のところへ詠草を持つて往ても、一向添削して呉れぬのをもどかしがりたる顔附、目のあたり見るが如し。景樹を罵りて、懶惰人といふところなど、これも母の機嫌取りといふの外はない。

江戸より米庵、有馬入湯願にて、六十日暇もらひ參、此の間忽然來訪、福井邊へも參、南都大阪とメグリ、有馬にも申譯の爲一日程にて、又々京へ還る筈にい、何分盛なる事どもにい、シカシ此の度は門人一人つれ、堀川書林に止宿、簡便埒明い處、小竹同流にい、書畫を搜居ひ事にい………(大阪、三谷軌秀氏藏)

市河米庵の訪問の事を物語つたので、六十日の有馬入浴と表を申立て、有馬へは申譯に一日しか行かず、アトは京阪奈良邊を遊び廻りて古書畫を掘り出して居るとはおもしろい。アノ金持の米庵が門人只一人だけ召連れて、宿屋へも泊らず、本屋に逗留して萬事手輕にやつて居りますところは、大阪の篠崎小竹そのまゝの遣り口でござりますとの穿つた話しには、梅颯も思はず破顔一笑したであらうと想ふ。

▲義齋と梅颯

人には人情と人道とあり、人情はしのびがたく、やまれぬもの也。これなければ人にあらず。又人道といふは、道理のたがへられぬものあり、これなければ、人たるの本體なし。故に人情のやむにやまれぬ事ありて、むせびかへり、これがはつるかなしみあればありとて、又どうもかうもたがへられぬもの有事を天性也人道也本心也能く明らめ悟りて、きつと情の行まゝなるを制して、はしるまゝにせず、きつと立すへ、堅く守て變せざる、これを人の道を得たりとす。その人情のやまれぬありとも、人道を以て制すべき事なるに、情慾のみ専に盛んにして、人道を以て制するすべをしらざる、これ鳥獸の道にして、人たるの道にあらず。世間人間の上、まぢくさまゝの變ありとも、かふより外かくてすゆべきなく、萬々の事、この準則を以てゆくべきよりなし、その所を能しれば、まよひうるたへなきはづの事也、こゝが合點ゆかぬと、諸事變あるたびに、當惑邪曲を出し、亂逆に至りて、人でなしとなり、世の笑ひものとなり終る事たちまち也。住馴し親里(大阪)を離れ、遠き田舎(安藝)にあるも、只一人の夫春水を頼にして在るとなるに、それだに又遠く離れ(江戸勤番)只ひとりおさな子(山陽)を育てける事、頼も力もなく、いかばかりのたけ

きかなしみ思ひつゝくるも、ばてしなし。しかれども、どのやうにないてもわめいても、おどりはねても、どふもかふもしようなく、こんきうしごく、せまりきつたる事、神々にいのりきせいし、人々にたのみ願ひても、ならぬ事はならぬ天命、いかんどもせひなく、いつそ死んだら、此おもひ此くるしみあるまいとかもへど、げんざいおさな子あり、老たる親、義齋自身あり、かなしみおもふ夫あり、こがるゝ兄弟あり、しぬるもしなれず、かゝる時、いかんとかせん、さりどていきもならず、たゞむねにむせかへり、くるしむ計也。しかれども、こゝに、につちもさつちもゆかれぬ、人の道といふものありて、そのせまりつめたる中に、凛々たる道義立すば、びくともせず、ころりともせぬもの有を、能々明め悟り、能ぞだてやしない、堅く執守るべし。しかれば一切のなげきうれへは、さらさらとゆきしものとけるごとく、わんらくなるべし。そを聖人も、仁者憂へず、智者は惑はず、勇者は恐れず、こそ仰られぬ。君子わたくしかつてなきゆへ、憂なし、人のうれへなげきは、皆わたくしかつて、よくより生ずる也。知くらく、義理すぢ道わかれぬから、めつたにやくにもたゝぬ事をあんじくらし、うろたへまどふなり。勇氣の志なきゆへ、萬事にへこ

たれ、おしこしすはらず、ひよろ／＼きなく／＼びく／＼し、みれんさもしき事をする也。さすれば、男も女も、此勇の志立すはるで、仁も義も智も信も出来る也。どかく、人らしき人にならんとおもは、心の剛にして、弱からぬが大徳にて、心よはきものは、大の大そん、やくにもたゝぬを、く／＼く／＼おもふも、皆勇なきゆへなり。勇とは、心いさみてつよく、ひるまぬをいふ。常々此心をしゆ行すべし、大の徳つく事なり。すでに此のたびの事でも、當時此天氣にても、さきだつて順氣にて、天下萬民悦び樂しみしに、かくふりつゝきて、民皆はつと／＼うわくし、いのりきたうし、なき悲み、うらみなげき、のたり／＼よまひ事のおり／＼かまびすしけれども、天氣よろしとして、せい出してふりぬく、これと同じ事、どふいふたどて、どふしたどて、どふもかふもならず、むかふの事、こちのちからにちへども、どふともしようなく、たゞ／＼わが心を立すへるより、外はほとんどとどなき事也。どのようなに世間の事、人間の事、さまざまの變事ありども、カクゴキメル、かふより外は、しようのなき事を、能々かくこきわめ、すつしりと、つよく勇志を立て立て立すへ、鐵石のごとく、びんぼゆるるきもせぬに、すつきり人情のやるせなきにまけず、

人道の本来を立すへ、戰場にひかつて、馬にひちくれ、君に先だつて打死すべき心もち、常々の養にある事にて、今その氣になれば、それになり、くにやつけはながれてやくたゝずになり、たゞ心で心をとり立て、すれば、氣しようもつれてつよくなり、りんくとしておかすべからざるのみさはを立て立てすへ、あつばれ手が、剛のものよ、賢女よ、義齋が子、彌太郎が妻、久太郎が母よ、婦人のかみよ、手本よ、ながき世までの、わらひはまれ、のわかれを、わするまじきものなり、あなかしこ。

一、どふで侍の妻となりては、町人百姓のような根性さげては、やくにたゝず。侍の妻とて、人に貴ばれ、敬はるゝからは、町人百姓どものやうな根性をさげて居ては、どんと身分がすまぬから、かくべつな所なければならず、かくべつな所とは、道を守りて勇み剛きにあり。ぐにぐなきづら、人に見すべからず、みれんな事、人にきかすべからず、秋の霜のおかすべからざるごとく、りんせんとすゞしく、立あがるべし。かりにも、よわきなみだ、もろき根性あるべからず、心で心をとりなをし、氣で氣をひきたて、うれひの思ひあらば、うたふて心を散すべし。くよく

ひねにたむべからず、おもふはやまひとなりつがさる、これ薬のと、わするべからず。すべらぼんのぼんど心をやるべし。

憂事のかさなる事はいさぎよく

世をいとふべき便ならまし

うき事はよに有程のならひぞと

おもひながして心はるけよ

何事も定まるみちとあきらめて

迷ひだにすな歎きだにすな

後二首は前にやりたるやうなり

七月十八日

父たゝ方

静どのへ (廣嶋、頼彌次郎氏藏)

これは、梅颯すでに春水に嫁し、廣嶋に下つてから、年々春水が江戸詰の不在中、女一人の腕にて、一家を治めてゆかねばならぬ辛さに、やゝ心よわきこと、大阪の

父親へ申送りたるらしきに對して、義齋より女一通りの教訓を懇諭したる手紙である。義齋は石田流の心學に通じたる人として、そのいふところ、平易明白、さながら心學道話をさくやうな心持がする。今の一般婦人界にも、これはどの好い教訓はあるまい。

▲梅颯夫人の終焉

梅颯夫人は、山陽の歿してから後十年、風疾に罹り、天保十四年十二月九日、八十四歳の長壽を以て終つた。墳墓は廣嶋比治山安養院なる夫春水の墓に並んである。安養院は今、廢寺となり、頼家の墓所は、多聞院にて管理して居る。父義齋の謂はゆる「凛々」として冒すべからざるの操を立てて立すへ、天晴手柄、剛のものよ、賢女よ、義齋が子、彌太郎(春水)が妻、久太郎(山陽)が母よ、婦人の鑑よ、手本よ、と長き世まで「の譽れをのこした梅颯夫人の香ばしい名は、山陽先生の遺芳と共に、萬世不朽である。(九月二十六日、補記)

小引

一番廣くその名を知られた學者……………一	廣嶋ではない大阪生れ……………一
五十川訥堂先生……………二	山陽の歿後恰も八十年……………二
山陽先生の母梅颯夫人……………二	夫人が終生の大事業たる日記……………二
一は梅颯夫人の別傳……………三	眞妻賢母の標本……………三
夫人もチャキ／＼の大阪人……………三	山陽彼れ自身の手紙……………三
山陽の父春水先生……………四	亨翁、春風、杏坪……………四
趙 陶 齋……………四	大阪の富豪吹田屋六兵衛……………五
大阪は實に文學界の中心……………五	中井先生の懷徳堂……………五
片山 北海……………五	混 沌 社……………五
蟹養齋、奥田尚齋……………五	寛政三博士の一人たる尾藤二洲……………五
一代の醉儒と呼ばれた篠田徳安……………五	十時梅屋……………五
江戸堀北通一丁目の濱側……………六	青山社といふ家塾……………六
春水といふ號……………六	江田 植 夫……………六
轟村の豪農細田周英……………六	大阪を第二の故郷……………六

花嫁御は誰……………六
飯岡義齋の娘しづ子……………六
合 登 願……………七
た祝ひに炬燵……………七
小澤 蘆庵……………八
圓満和樂の家庭……………八
年弱も年弱……………八
久太郎の産衣……………九
春水の歸郷……………一〇
竹山先生の別杯……………一〇
髪置宮参り……………一〇
杏坪の紀行……………一一
山陽の教育は母梅麗の手一つ……………一一
立派なる日記の模範……………一二
妹なは子は梅月……………一二
初めて入學……………一二

立賣堀南裏町……………六
當時評判の婚禮……………六
天橋立で奇石……………七
新婚旅行を京の春……………八
松のみさを……………八
江戸堀の宅に呱呱の聲……………八
子年の臘月生れは蘇東坡と同じ……………九
忠孝の二字……………一〇
淺野重辰公……………一〇
西研屋町に屋敷……………一〇
春水の江戸上番……………一一
はしめて廣嶋の人……………一一
愛兒の山陽に關する記録……………一二
婦人界に稀有なる一大現象……………一二
梅花の薫り……………一二
母の心配……………一二

疋齋が見初め……………一三
終日繪かき遊ぶ……………一三
病牀 日誌……………一三
里 歸 り……………一三
武術修業……………一四
學問よりも武者繪本……………一四
雜誌に耽る小學兒童……………一五
久太郎に實名を付け遣し休……………一五
文章の處女作として立志論……………一六
頼の若先生……………一六
赤崎海門……………一七
朱子學派の史學者……………一七
積留の祝……………一七
倉成龍清……………一八
前髮取、元服の禮……………一八
江戸修行之準備……………一八

一寸まどろむ……………一三
菅茶山先生……………一三
家庭研究の好資料……………一三
九歳で又大阪を見物……………一四
藩の用人築山嘉平……………一四
歴史學の本領……………一四
國泰寺裏門前の屋敷……………一五
麤の一字にて休……………一五
天の回轉……………一六
立志の詩……………一六
柴野栗山……………一七
肝、狂氣、無言……………一七
日本の東坡……………一八
古川古松斬……………一八
石州の有福温泉へ入湯……………一八
江戸道中の模様……………一九

姫井桃源……………一九
 著論誰追賈誼風……………二〇
 三 助……………二二
 モー好い加減にた休み……………二二
 大義名分……………二二
 線香一本……………二二
 青年病、煩悶病……………二三
 結 納……………二三
 興味ある問題……………二三
 花聲山陽の胸の中……………二四
 禁足處分……………二四
 改亭の別號……………二五
 花嫁の述懐……………二六
 義太夫のサワリ……………二六
 本居宜長……………二七
 ホイとそのまゝ運電……………二八

彌生の末の花の旅……………二〇
 山陽詩鈔……………二一
 武家の歴史……………二一
 通鑑綱目……………二二
 詩才と史才……………二二
 喜びの裏には悲しみ……………二三
 婚禮をさせるのが一番の捷徑……………二三
 新聞の三面種……………二三
 いよ／＼興入り……………二四
 夜遊び病……………二四
 淳子の病氣……………二五
 輔 仁 會……………二五
 久太郎さんは願念な……………二六
 橋本稻彦……………二七
 悔みの使……………二七
 青年時代の豊太閤……………二八

後の今宵ぞ月に泣ぬる……………二八
 狂妄なりに宿志も有之……………二九
 中井竹山から便り……………三〇
 江木煙水……………三一
 牧百峰、宮原節庵、村瀬藤城……………三一
 幽室に屏居……………三二
 山陽廢嫡……………三三
 玉のやうなる男の兒……………三四
 春水は久々にて歸藩……………三五
 森夫の盜賊のと申事には無之也……………三六
 昌平坂學問所に於て囑託講師……………三七
 一陽來復……………三八
 好箇の一書齋……………三九
 王政復古の先聲……………四〇
 小寺鳩峰、大槻平泉……………四〇
 偶病の手品……………四一

嫡子出奔仕仕へば……………二九
 さすがは山陽の叔父さん……………三〇
 中井履軒の手紙……………三〇
 森田節齋……………三一
 いつか懐妊……………三一
 櫻二と偶稱……………三二
 夫婦義絶……………三三
 津 庵……………三四
 彌太郎廢息頼久太郎……………三五
 林大學頭、古賀精里……………三七
 山陽二十四歳の誕生日……………三八
 天地間一本立ち……………三八
 日本外史の初稿……………三九
 篠崎小竹……………四〇
 古賀穀堂……………四〇
 山陽の知己……………四一

市河寛齋、米庵……………四一
 山陽文編……………四二
 西山拙齋……………四二
 蠟燭一寸……………四三
 久太郎は灸……………四四
 龜井昭陽……………四五
 北邊恂々……………四六
 林子平……………四六
 武元登々庵……………四七
 廣江殿峰、臼杵鹿垣、金子熊介……………四七
 黃葉夕陽部舎の厭塾……………四八
 放言か妄語か……………四九
 菅塾へ罷越ゆては……………五一
 龜山本助、藤井機園……………五三
 長四疊の狭苦しい一室……………五三
 得手と申ては史學文章……………五四

菊池五山……………四一
 義弟權二郎……………四二
 照蓮寺に頼家の墓……………四二
 小文規則……………四四
 新策……………四五
 三太郎……………四五
 僕父子も編行伍ゆ……………四六
 白川侯御歸役させ度事に御座ゆ……………四七
 雲華……………四七
 又、又、又逆戻り……………四七
 春水山陽父子の守本尊……………四八
 隠者にて著述等の志のみ……………五〇
 寸心有所期……………五二
 夏衣の目錄……………五三
 悵望青天嗚嗒葉……………五四
 必要の大典とは藝州の書物……………五四

闇齋、仁齋、徂徠……………五四
 斷然京上り……………五六
 追手の役を勤める春風……………五七
 小野纏翁……………五七
 備も京も五十歩百歩……………五八
 案外奇齒の人……………五九
 善玉、悪玉……………六〇
 廣嶋邊へは内證々々……………六一
 新進一派の頭上……………六二
 越智高洲……………六三
 喰へぬですこ……………六四
 篠崎三嶋……………六四
 金谷興詩……………六五
 福井丹波守……………六五
 第二回の遊歴……………六五
 旅芝居の木戸番御理り……………六六

加賀、薩摩より所望に預ゆても……………五五
 事後承諾……………五六
 小石元瑞……………五七
 酒筆一兩一步……………五八
 花柳を篠崎氣遣申ゆ……………五八
 高利の方は危く……………五九
 鴨水も此節納涼……………六〇
 中山城山の子龍山……………六一
 三十にして而して立つ……………六三
 札付仲間へ道入……………六二
 村瀬栲亭……………六四
 故田口鼎軒博士……………六五
 播州に遊歴……………六五
 胤孫三人……………六五
 後藤松陰……………六六
 北條霞亭……………六七

小野本太郎	六七	新宮は此間割愛手切に及申侍	六七
菅原專輔、嶋孟徳	六八	杏坪、采真父子	六八
一家團樂	六八	三嶋怡齋、菅三間	六九
田能村竹田	六九	開谷學枝	六九
武元北林	六九	歸省亂稿	六九
三千三(達堂)	六九	浦上春琴、中嶋棕隱	六九
川村屋辨助	七〇	一時徳太郎と改稱	七〇
りわ子	七〇	春水危篤	七〇
今月より少々魚物	七一	團房は三年禁絶	七一
十年前とは見識かはり申侍	七一	招月亭主人	七一
武内確齋、小原梅坡	七二	小田南岐	七二
山陽と酒	七二	酒黨に入つた記念	七三
玄裳縞衣の力	七四	小杯のチビく呑み	七四
ギヤマンの鐘	七四	松永花蓮	七四
少琴女史	七四	榊嶋石梁	七五
草場彌川	七五	江芸閣	七五

山陽先生を軟派あつかひ	七五	家庭れもひのサイノロヂー	七六
ナホレチンの話	七六	野田笛浦	七六
哀隨園、沈歸愚	七七	澁江松石	七七
雲耶山耶	七七	辛嶋鹽井、村井琴山	七八
道中は眼鏡無用	七八	前後兵兒談	七八
鮫嶋白鶴、小田百谷	七八	肥後に過ぎたる物が三つ	七九
廣瀬淡窓、牧園茅山	七九	文政之元十一月	七九
耶馬溪山水長卷	七九	山陽鼻高如天狗	八〇
梅隠は達堂(五歳)の手を引いて	八〇	初老の孝子に誘はれて	八一
山陽は一足先き着阪	八二	ことしで丁度三十二年目	八三
菓子入の袋、菓子共失ふ	八三	淺川柳子の墓	八四
山口剛齋、西周、福羽美靜	八四	三十石	八五
外の茶亭より藁が見つけて	八五	月峰上人	八五
嶋原の太夫の道中	八六	三軒屋の雪亭	八六
吉野の花見んと旗だつ	八七	れりゆ髪を結ひくれる	八七
山陽は老母のれ傍に附き切り	八八	筆庵縁談	八八

香川景樹……………	八九	熊谷鳩居堂……………	八九
白河樂翁侯の臣田内主税……………	八九	玉子焼こゝのは至つて上品……………	八九
根殺亭飛雲閣……………	八九	湖水見物……………	八九
宇治行……………	九〇	火どもして住吉社へ……………	九〇
往復百日間上方見物……………	九一	六百日は旅座多々……………	九二
女弟子細香なるものゝ墨竹……………	九二	容貌頗可觀而誓志不嫁……………	九二
下地の病にフクリンカケ……………	九三	玉蘊女史……………	九三
廣嶋の才子を慕ひ……………	九三	片山ね蘭……………	九四
大田錦城……………	九四	山陽を江戸ッ兒……………	九五
孫辰藏の初節句……………	九五	齋 薇 園……………	九五
佐藤一齋……………	九五	たばさまに買うたのちや……………	九六
私、復舊名(久太郎)……………	九六	寺川茂司馬の妹臯子……………	九七
水 西 莊……………	九七	網 嶋……………	九七
春水遺稿を整頓……………	九七	八大家文の評點……………	九七
飽齋三絃徹曉聲……………	九八	地も家も我物に仕度……………	九八
富士谷御杖……………	九八	子孫に至り困窮可仕哉……………	九九

竹田、木米……………	一〇〇	復 藏……………	一〇〇
村瀬藤城……………	一〇〇	忠臣藏、切に梅ヶ枝……………	一〇一
とらや見物……………	一〇一	瀧原宋閑、鈴鹿豊後守……………	一〇二
岩城清五郎……………	一〇二	賀茂季麿、田邊支々齋……………	一〇二
袖蘭に舞を所望……………	一〇二	久太郎過酒……………	一〇三
久太郎按摩しくれる……………	一〇四	山紫水明處……………	一〇四
立 齋……………	一〇五	景樹へ申遣はす處障子貼かけ……………	一〇五
久太郎考への煎薬……………	一〇六	阪東壽太郎の重の井……………	一〇六
竹山先生遺稿……………	一〇七	大鹽 中齋……………	一〇七
藤堂詢堯侯……………	一〇七	東山御幸拜見……………	一〇八
竹洞、存琴、梅逸……………	一〇八	母坐鑿與兒草鞋……………	一〇九
除一大に酔ひ大迷惑……………	一一〇	久太郎揮筆夥し……………	一一〇
春風四十八年振りにて……………	一一一	三木八郎生る……………	一一一
是を立誓の日と仕……………	一一二	野呂介石……………	一一三
氣まゝものゝ病身もの……………	一一四	中村梅玉……………	一一五
河合半之介……………	一一六	野本猶庵……………	一一六

故人別時之面……………一六
 松陰の婚禮……………一八
 海紅園小稿……………一八
 絶わて久しき杏坪……………二一
 山陽は嬉し涙……………二二
 兒玉旗山……………二三
 是日會者凡十有八人……………二三
 平家の御用……………二四
 山陽先生の駱駝……………二五
 日野南洞公……………二六
 貫名海屋、北小路竹窓……………二七
 大窪詩佛……………二七
 遺愛の竹杖……………二八
 早速國元老母杯へも申遣……………三〇
 メンドリン氏の譯本……………三一
 日本樂府……………三五

小人嶋の焼もの……………一七
 善哉園小稿……………一八
 外史の刪修始めて成功……………一八
 雨を冒して吉野……………二一
 大堀正輔……………二三
 大槻磐溪……………二三
 藤井雪堂……………二四
 貫之躬恒に視せしむるも……………二四
 自慢の劍菱……………二五
 舞子三人……………二六
 十句花月の四字……………二七
 先生マア善いぢやございませんか……………二八
 外史の稿本を差上げ……………二九
 八十年記念……………三〇
 當時の公正證書……………三五
 春水十三回忌……………三五

坂井虎山……………一三六
 精進落……………一三六
 煎茶本色……………一三七
 五六杯喜撰を崇り申仕……………一三九
 美人の前に劍を談ずるが如し……………一四一
 韓 凹 巷……………一四一
 南洞公の御來臨……………一四三
 鹽谷岩陰入塾……………一四五
 故重野博士……………一四五
 天神の船渡り……………一四六
 大津行(十五夜の記、梅隠筆)……………一四六
 齋藤拙堂……………一五〇
 米田かつ子(二洲の娘)と水竹……………一五一
 川北温山……………一五二
 箕面行……………一五二
 耶馬溪圖卷……………一五四

第四回目の上方見物……………一三六
 村雨、一時雨……………一三七
 關奢侍を一炷……………一三八
 門田朴齋、落合雙石……………一四一
 藤屋は膝栗毛……………一四一
 未見妻子面内に花のかは……………一四一
 山陽賢契……………一四四
 日 本 贈……………一四五
 鍋嶋屋敷……………一四六
 糖、子を産む……………一四六
 山陽は詠みも習はぬ歌……………一五〇
 介川綠堂……………一五一
 外史校考……………一五一
 東方赫々屬天明……………一五二
 韋庵の二男東三郎(誠軒)……………一五三
 山陽の肖像を商標……………一五四

尾道のスケッチ	一五四	山陽の論議	一五五
國朝政記(日本政記)	一五五	關藤藤陰	一五六
山陽と中齋	一五七	洗心洞割記	一五七
山陽の墓碑	一五七	月瀨觀梅	一五七
父子の見納め	一五八	江戸で一仕事	一五八
四度日記御整録	一五九	三木三郎大飯を食ひ侍	一六〇
伊丹酒のいたみをランビキ	一六〇	白石士徳	一六〇
最後の訣別	一六一	藤井竹外	一六一
古本大學刮目	一六一	中川漁村	一六二
桂園一枝	一六二	最後の旅行	一六二
略 血	一六二	吾有一腔血、其色正赤	一六三
春秋臆斷	一六三	神田南宮	一六五
猪飼敬所、樂川星巖	一六五	南北朝の議論	一六五
一片精神依然	一六五	國史略は年代記	一六六
河喜では無うて河清	一六八	形見分け	一六九
新宮涼庭	一六九	詩の絶筆	一七〇

天保三年九月二十三日	一七〇	光林寺、長樂寺	一七一
葬式の行列	一七一	燒 香 願	一七二
愁傷の段御憐察下さるべく侍	一七三	追悼の詩文	一七四
略血後の肖像	一七四	筆庵は山陽の風采そつくり	一七四
故森田思軒君	一七四	先生の遺跡を維持保存	一七六
中村確堂	一七七	五十年祭、祭菜料	一七七
龜谷省軒	一七七	贈正四位の宣下	一七七
河野小石	一七七	煮 蕎 除 情	一七七
山陽の影響	一七七	曲亭馬琴、俠客傳	一七七
近古史談	一七七	岡田鴨里、日本外史補	一七七
中村敬字	一七七	佐久間象山	一七八
靖獻遺言	一七八	鈴木貞齋	一七八
山陽の門人	一七八	維新の忠臣	一七八
大阪府立博物館	一七八	山陽研究	一七九

明治四十四年十月一日印刷
明治四十四年十月五日發行



定價金壹圓

大阪市北區此花町二丁目四十二番地

木崎愛吉

大阪市東區橫堀二丁目二十一番地

林忍

大阪市東區橫堀二丁目二十一番地

大阪龍雲舍

電話本局二六番

著者兼發行者
印刷者
印刷所

大阪市東區備後町四丁目

發賣元

吉岡寶文館

振替口座大阪四三番
電話東四三番

東京市日本橋區本石町三丁目

同 吉岡寶文館

好尚木崎愛吉輯注

手紙の頼山陽

東京有樂社發行

東京有樂社に於て、頼山陽先生の手紙全集發刊の企てあり、「家庭の頼山陽」及び本書「頼山陽と其母」の著者の手に由り、輯注を終へ、現に印刷中にあり。

山陽少年時代より晩年の絶筆に至るまで、年代を追うてその手紙を排列し、一々簡明なる評注を附したる此の「手紙の頼山陽」は、一種の別趣味を以て讀まるべき、山陽先生の別傳也、逸傳也。

天下の絶品たる山陽先生の手紙は、遺憾なく、この篇に於て、その全豹を窺ふを得ん。

卷首には、原寸大の玻璃版を以て、絶品中の一大絶品たる、頼三樹の誕生と命名との由來を語れる、山陽先生が其母梅颯に宛てたる手紙を掲げて、さながらにその風韻を掬せしめんとす、新秋燈下の好伴侶、何物か之に若かん。

續刊豫告

好尙 木崎愛吉述

(一) 森田節齋

股稿

(二) 篠崎小竹

同

(三) 猪飼敬所

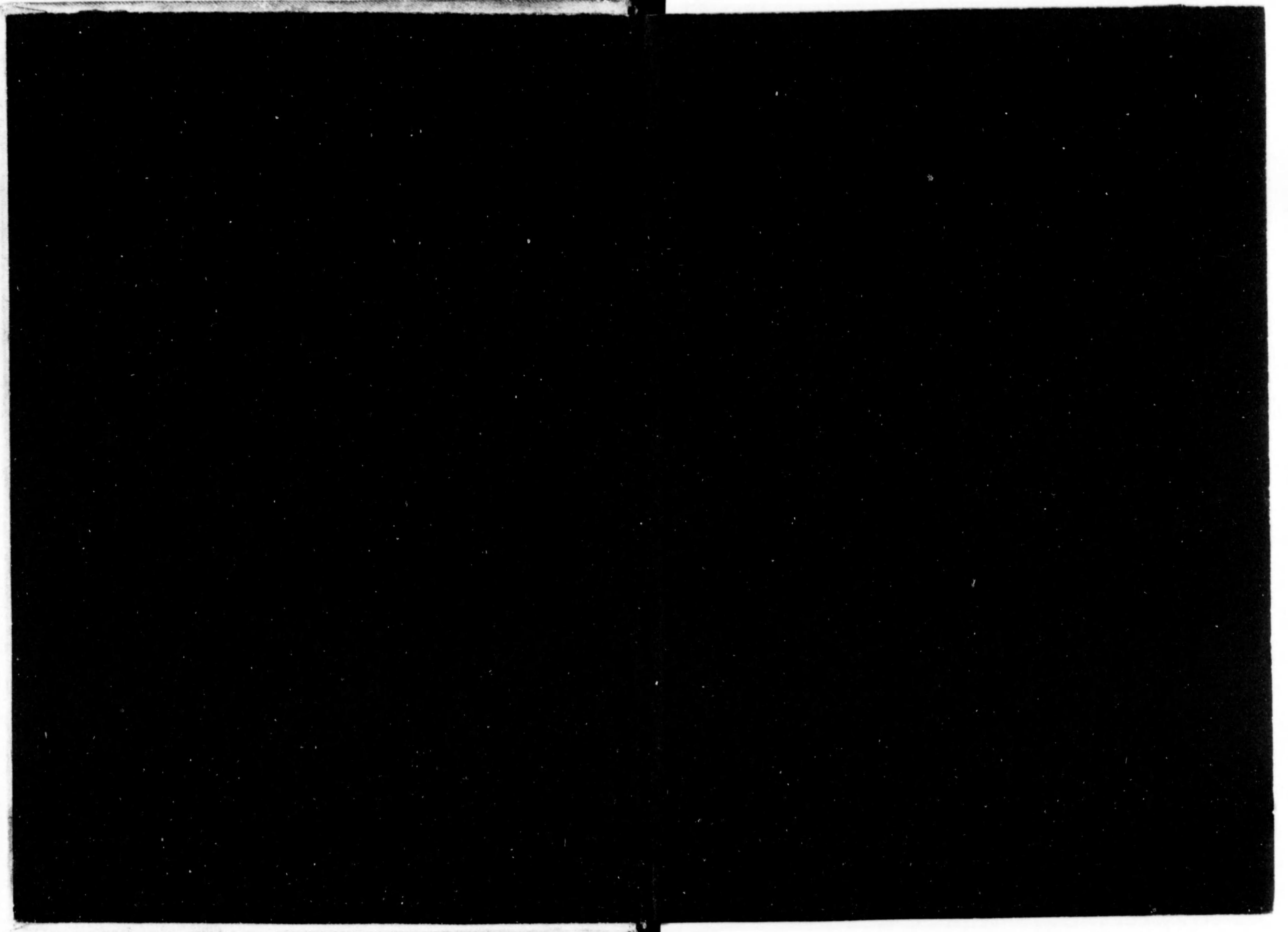
同

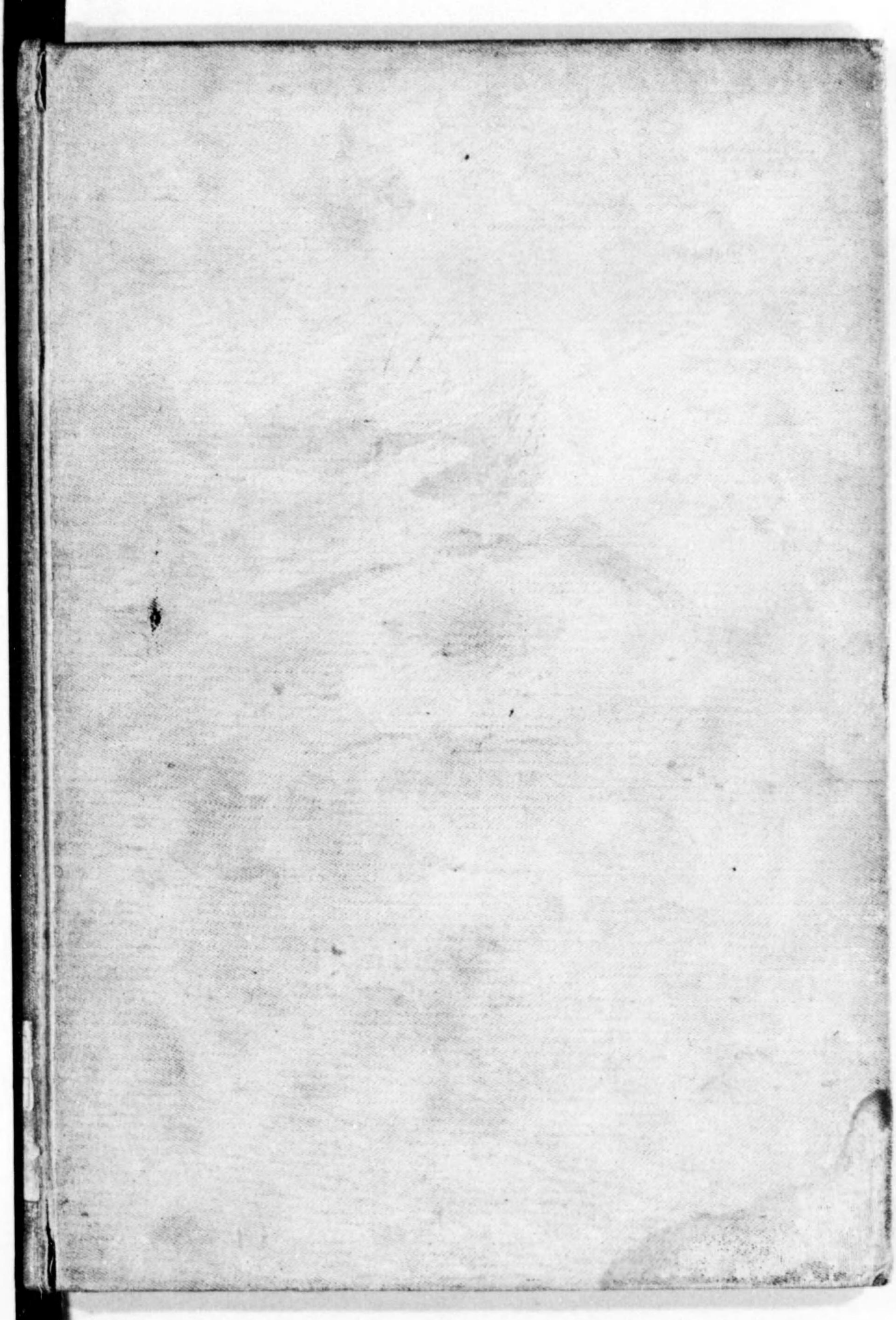
(四) 小島省齋

起稿中

(五) 日本金石史

同







007529-000-7

289.1-R15Kr

頼山陽と其母

木崎 好尚/著

M44

ACK-1362



